

和泉式部とその娘小式部内侍

津久井 勤

一、はじめに

和泉式部親子のこの時代は一条天皇の中宮彰子と中宮定子に仕えた女房達による最も華やかな時代を生きた女流歌人で占められている。中でも中宮彰子は権力者道長の娘であったがため百人一首の女流歌人が多く仕えている。

和泉式部はその生涯において、二人の受領(橘道貞、藤原保昌)との結婚、二人の親王(為尊親王、敦道親王)との交際の間にもいろいろな人々との交流を通じて、和歌を詠んでいる。当時、歌合せなどの公式の場で詠むことが多かった中で、これとは離れて、私的な結婚生活や交際のなかでの悩みを訴えた歌が多いのに驚かされる。勅撰和歌集には二四六首入っており、女流歌人として伊勢の一七六首を大きく上回る代表歌人である。一方、小式部内侍は和泉式部の最初の夫橘道貞との間に生まれた娘である。これら親子の和歌について述べる。

二、和泉式部の和歌と特徴

当時最大の権力者である道長からは、「うかれめ」(和泉式部集二二六)と言われ、紫式部からは「紫式部日記」の中で、「おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ(感心しない面)。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みぎまにこそは

べらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目に留まる詠みそへはべり」との評がある。外的には自由奔放に貴公子との交際を行っていたと見られてはいる。しかし、反面内的には恋の悩みを抱えながらの生活であったかと考えている。

ここでは、「和泉式部集」と敦道親王との恋により宮邸に招かれるところまで終わる「和泉式部日記」を中心に、大鏡や栄花物語なども参考にしてまとめた。

二、一 和泉式部の経歴

式部は、父越前守大江雅致と母越中守平保衡女(太皇太后昌子内親王の乳母で介内侍と呼ばれていた)との間に貞元・天元頃(九七七から九七九年)生まれたと見られている。この時代、女房の生没年が未詳の場合が多く、式部についても例外ではない。

父が越前守に就任する前、太皇太后大進を努めており、橘道貞が部下の権大進であった。このような関係から父の勧めで式部二十歳前の長徳二、三年(九九六、七)頃道貞と結婚したと見られている。その後、一年ほどで女子を出産(小式部内侍)している。

しかし、まもなく冷泉天皇第三皇子の弾正宮為尊親王と恋に落ちる。両人の出会いがどのような形であったかは判っていないが、母が前述のように、太皇太后昌子内親王(冷泉天皇皇后)の乳母であったことで、親王との出会いがあったのかもしれない。この親王も長保四年(一〇〇二)に二六歳の若さで夭逝。翌年には同母弟帥宮敦道親王と恋に落ちる。こうした中で、夫道貞が和泉守から陸奥守となって下向する。その後、新たな妻を下向させている。こうして道貞とは別れていった。

しかし、敦道親王との交際も親王が寛弘四年（一〇〇七）に二七歳の若さで夭折する。喪の明けたときから、道長の要請もあって、中宮彰子に仕える。娘の小式部内侍も一緒である。ここには、紫式部や赤染衛門などがいた。

その後、道長の家司藤原保昌と結婚する。記録では小右記に寛仁二年（一〇一八）には既に佐馬頭保昌妻式部としてみえる。従って、結婚したのは幅があるが、寛弘八年から寛仁元年の長和年間のことになる。式部とは二十歳程度の年の開きがあり、武勇に優れていたことで知られている。

万寿二年（一〇二五）に小式部内侍が三十歳を満たないで藤原公成の子出産後体調不良もあって、亡くなった。式部は母として娘の死は大きな悲しみであり、哀傷歌を残している。

保昌とは紆余曲折があったものの、長元九年（一〇三六）に亡くなるまで式部が連れ添ったと見られる。その後一人身の経緯については不明である。

以下には、これらの結婚、交際や交流を通して詠まれた歌を紹介しながら式部の恋の遍歴を述べる。

二・二 橘道貞との結婚と離別

① 道貞との結婚

前記のように、父雅致の部下であった道貞と結婚することになり、小式部内侍も翌年に生まれるが、長保元年（九九九）二月には和泉守として赴任する。式部は京にあって、道貞と歌を交わしている。

次の歌は、葵祭りの賑わいの中で、一人寂しく過ごしていた折の歌と見られる。なお、歌の番号は和泉式部集による。

詣づるほどになりて、道のほど着るべき狩衣なむ様なる物ぬはする、やるとて

・うちかはし夜きるまじきあさぎぬはぬふも物うきものにぞありける
(二二四九)

とてやりたれば、狩衣を、「きよく、かたなどもよし」といふことをいひたれば

・かり衣我によそふる物ならばたもとよくしもあらじとぞ思ふ(二二五〇)
はなだのおびの所々かへりたるをきかへて、をとこのおこせられたれば

・なれぬればはなだのおびのかへるをもかへすかとのみおもほゆるかな
(二二五一)

をとこの、みたけさうじとて、ほかに□(脱文・あるに)か)みあれの日、あふひにさして

・かざせどもかひなき物はおのがひくしめの外なるあふひなりけり
(二二四六)

次の歌は、「佐野の浦」をあずま路にありと思っていたが、泉佐野にあることを知らせてもらったことで返歌している。

和泉といふ所へいききたるをとこの許より、「さののうらといふところなむここにありけりとききたりや」といひたるに

・いつみてかつげずはしらむあづまちと聞きこそわたれさのの舟橋
(二二五二)

この歌は、急ぐことはないから都の花も終わらぬうちにもいらっしやればと歌を送っている。

田舎なる人のもとより、三月十余日のほどにいひやる

・まじこむと急ぐことこそかたからめ都の花のをりをすぐすな(一二五三)

以上のように道貞に対してのこまやかな歌を贈っている。しかしながら、長続きしなかったようで、その後、道貞は父が見込んだように、受領としての才能があっても、若い熱情的な式部には実務的な生活にあきたらず気持が離れていったようである。

② 弾正宮為尊親王との恋と道貞との離別

こうしているうちに、弾正宮為尊親王と恋に落ちる。このことが噂になると、父には勘当される。そのことがあって、

若菜をつけて父に歌を贈る。

正月七日、おやの勘事なりしほどに、わかかなやるとて

・こまごまにあふとは聞けどなきなをばいづらはけふも人のつみける

(一二五二)

返し、おや

・なきなぞといふ人もなし君が身におひのみつむと聞くぞくるしき

(一二五三)

しかし、勘当は許されず、為尊親王との交際が行われる。

こうした中で、道貞邸を離れることになる。

いささゑする事ありて、をとこのいへをさるとて、つねにするまくらにかきつくる

・かはりぬむちりばかりだにしのぼじなあれたるとこの枕みるども

(二〇一)

装束どもつつみておく、革のおびにかきつく

・なきながす涙にたへたえぬればはなだの帯の心地こそすれ(一一一〇)
よそよそになりたるをとこのもとより、位記と云ふ物こひたる、やるとて
・哀れわが心にかなふ身なりせばふたつみつまでなほもみてまし

(一一一一)

ところが、不思議なことに、この間の親王との歌のやり取りが見られない。その一方で、道貞にその後も歌を何回となく贈っている。

みちのくにの守にてたつをききて

・もろともにたたまし物をみちのくの衣の関をよそにきくかな(八四七)

陸奥国へいひやる

・たかかりしなみによそへてその国にありてふ山をいかにみるらむ

(九一〇)

二・三 為尊親王との別れ

為尊親王が、当時流行していた疫病で長保四年(一一〇〇二)六月十三日に亡くなっている。栄花物語巻第七とりべ野「三一 為尊親王」

弾正宮うちはへ御夜歩きの恐ろしさを、世の人やすからず、あいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる、今年はおほかたいと騒がしう、いつぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過ぐしつあさましかりつる御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせたまひて、うせたまひぬ。このほどは新中納言、和泉式部などに思いつきて、あさましきまで

おはしましつる御心ばへを、憂きものに思しつれど、上（謙徳公・伊尹九女・為尊親王室）はあはれに思し歎きて、四九日のほどに尼になりたまひぬ。

為尊親王とは一年足らずの交際であつたらうか。親王が亡くなられたことで、式部も喪にふしていることが、「和泉式部日記」に見える。しかし、次に述べるように同母弟帥宮敦道親王との交際が始まる。

二・四 帥宮敦道親王との恋

敦道親王との出会いから、宮邸に招き入れられるまでの経緯が「和泉式部日記」に詳しいので、これを引用しながら述べる。

① 親王との出会い

式部日記は次のように、故宮に仕えていた童が、今は敦道親王に仕えており、式部が思い沈んでいるとき、訪れたことから始まっている。

夢よりはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるにほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。

あはれにもののおぼゆるほどに来たれば、（女）「なか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを」など言はずれば、（童）「そのこととさぶらはでは、なれなれしきさまにやと、つつまじうさぶらふうち、日頃は山寺にまかり歩いてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまう

らるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ」と語る。

このとき、親王から古歌「五月待つ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする」（古今集巻第三夏 一三九 読み人知らず）を踏まえた橘の花を贈られ、式部は次の返歌をしている。

・薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると
（二二七）（故兄宮とそっくりなお声かどうかじかにお聞かせください）と

聞こえさせたり。

宮からの返し

・おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずやと書かせたまひて、賜ふとて（宮）「かかること、ゆめ人に言ふな。すきがましきやうなり」とて、入らせたまひぬ。

式部からの返しはなく再び宮から

・うち出ででもありにしものをなかなか苦しきまでも嘆く今日かな

女（式部）もとも心深からぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきことも目にとどまりて、御返り、

・今日のまの心にかへて思ひやれながめつつのみ過ぐす心を

宮から

・語らはばなぐさむこともありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ

（宮）「あはれなる御物語聞こえさせに、暮れにはいかが」とのたまはせければ、

女返し

・なぐさむと聞けば語らまほしけれど身の憂き事ぞ言ふかひもなき

「生ひたる蘆にて」「何事も言はれざりけり身の憂きは生ひたる蘆のねのみ泣かれて」古今六帖第三 うき、かひなくや」と聞こえつ。

式部は一応断つてはいるが、宮の方では、女の思いもかけない時に出かけようと身支度して、お粗末な車でお出でになる。

夜も更けてくるのにそのままではと

(宮) はかもなき夢をだに見て明かしてはなにをかのちの世語りになむ

(女) 世とともにぬるとは袖を思ふ身ものどかに夢を見る宵ぞなき

(宮) 「かろがるしき御歩きすべき身にてもあらず。なさけなきやうにはおぼすとも、まことにものおそろしきまでこそおぼゆれ」とて、やをらすべり入りたまひぬ。

いとわりなきことどもをのたまひ契りて、明けぬれば帰りたまひぬ。

後朝の歌(宮)

・恋と言へば世のつねのとや思ふらむ今朝の心はたぐひだになし

御返り(女)

・世のつねのことどもさらに思ほえずはじめてものを思ふ朝は(八七七)こうして交際が始まるが、式部の他の男との噂などもある中で、式部がこれを否定しながらの歌のやり取りが続く。

宮「日ごろは、あやしき乱り心地のなやましきになむ。いつぞやも参り来てはべりしかど、折あしうてのみ帰れば、いと人げなき心地してなむ。」

(宮) よしやよし今は恨らみじ磯に出でて漕ぎはなれ行く海人の小舟をとあれば、あさましきことどもを聞こしめしたるに、聞こえさせむも恥づ

かしけれど、このたびばかりとて、

(女) 袖のうらにただわがやくとしほたれて舟ながしたる海人こそそなれ(八八四) (袖に涙を流すことをひたすら自分の努めとばかりしているものですから、舟を流した海人のように宮さまに取り残されました) と聞こえさせつ。

七夕のむなしい頼み

(宮) 思ひきや柵機(たなばた) つ女に身をなして天の河原をながむべしとは

とあり。さはいへど、過ごしたまはざめるはと思ふも、をかしうて、(女) ながからむ空をだに見ず柵機に忌まるばかりのわが身と思へばとあるを御覧じて、なほえ思ひはなつまじうおぼす。

八月、石山詣で・よみがえる愛

(宮) 関越えて今日ぞ問ふとや人は知る思ひたえせぬ心づかひを「いつか出でさせたまふ」とあり。

近うてだにいとおぼつかなくなしたまふに、かくわざとたづねたまへる。をかしうて、

(女) あふみじは忘れぬめりと見しものを関うち越えて問ふ人やたれ(一一三)

かかるほどに、いでにけり。

(宮) 「さそひみよ、とありしを、急ぎ出たまひにければなむ

あさましや法の山路に入りさして都の方へたれかさそひけむ
おりかえし、ただかくなむ

(女) 山を出でて冥き途にぞたどりこし今ひとたびのあふことにより

十月、手枕の袖・愛のたかまり

わざとあはれなることのかぎりをつくり出でたるようなるに、思ひ乱るる心地はいとそぞろ寒きに、宮も御覧じて、「人の便なげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここに、かくて、あるよ」などおぼす。あはれにおぼされて、女寝たるやうにて思ひ乱れて臥したるを、おしおどろかせたまひて、

(宮) 時雨にも露にもあてで寝たる夜をあやしく濡るる手枕の袖

この歌に対しての式部の返歌はなく、ただ月影に涙がこぼれて何も申し上げずにいた。

その朝、頼もしき人もなきなめりかしと心苦しくおぼして、宮から、「今の間いかが(今はどうしておいででしょうか)」とのたまはせければ、御返り、

(女) 今朝の間にいまは消ぬらむ夢ばかりぬると見えつる手枕の袖

と聞こえたり。「忘れじ」と言ひつるを、をかしとおぼして、

(宮) 夢ばかり涙にぬると見つらめど臥しぞわづらふ手枕の袖

その後、宮は式部を宮の邸に連れて行こうとお思いになる。しかし、よからぬ噂が立ったりしたのだから、式部も物笑いになる(「召人」になること)のではないかなど思いあぐねて、直ぐにはその気になれず思い悩んでいる中で宮から、

・うたがはじなほ恨みじと思ふとも心にかなはざりけり

御返り

・恨むらむ心は絶ゆな限りなく頼む君をぞわれもうたがふ(四一四)

と聞こえてあるほどに、暮れぬればおはしましたり。(宮)「なほ人の言ふことのあれば、よもとは思ひながら聞こえしに、かかること言はれじとおぼさば、いざたまへかし」などのたまはせて、明けぬれば出でさせたまひぬ。

② 親王邸へ

こうした紆余曲折の後、十二月十八日になってやっと宮邸入りとなった。しかし、その寸前まで、

いかにおぼさるるにかあらむ、心細きことをのたまはせて、(宮)「なほ世の中にありはつまじきにや」とあれば、

(女) 呉竹の世々のふるごとと思ほゆる昔がたりはわれのみやせむ(四三〇)と聞こえたれば、

(宮) 呉竹の憂きふししげき世の中にあらじと思ふしばしばかりも

ということがあって、式部は当初一時的な外出と思っていたようだが、宮の言葉で、侍女を一人連れて宮邸に入ることになった。

宮邸では、初めての正月を迎えるなどしているうちに、正妻の濟時の娘が実家に引越して行った。ここで和泉式部日記は終わっている。

③ 帥宮親王との別れ

その後の寛弘年間の敦道親王と式部のことは不明な点が多いが、寛弘二年に宮の子(後に岩蔵宮と呼ばれる)を出産している。また、宮が寛弘四年四月二五日の一条院内裏において詩宴が行われ、これに列席したことが御堂関白記や大鏡に見える。しかし、この頃から体調が良くなかったようである。同年十月二日に夭折する。宮とは僅か四年半ほどの交際であった。宮の薨

去された後、暫く宮邸に留まっていたようだが、退出して一年間喪に服している。式部集にはこの間に詠まれたと見られる挽歌が一二二首見える。その幾つかを以下に示す。

最初の歌は、故宮の御四九日、誦経の御衣ものうたする所に、「これを見るがかなしき事」などいひけるに

・うちかえしおもへばかなしけぶりにもたちおくれたるあまの羽衣

(九四〇)

また、人のもとより、「おもひやるらむ、いみじき」などいひたるに

・ふじごろもきしよりたかき涙がはくめるこころの程ぞ悲しき(九四一)

同じ所の人の御許より、「御手習のありけるをみよ」とておこせたるに

・流れよるあわとなりなで涙川はやくの事をみるぞ悲しき(九四二)

しはすの晦の夜(この日に霊が帰ってくると思われていた)

・亡き人の来る夜よと聞けど君もなしわがすむ里や魂なきの里(九四三)

なほあまにやなりなまし、と思ひたつにも(五首の内二首)

・すてはてむと思ふさへこそ悲しけれ君に馴れにし我が身と思へば

(九五三)

・思ひきやありて忘れぬおのが身を君がかたみになさむものとは(九五四)

火桶にひとりいて

・むかひみてみるにもかなしけぶりにし人をおけびの灰によそへて

(九六二)

つかはせ給ひし御硯を、おなじ所にてみし人のこひたる、やるとて

・あかざりしむかしの事をかきつくるすずりの水は涙なりけり(九八六)

二二五 上東門院彰子に出仕

式部が故宮の喪に服していたのが寛弘五年の秋までであった。一方、この年の九月に一条天皇中宮彰子が皇子敦成親王を出産する。さらに懐妊されたこともあって、吉事がかさなる。このような折に、中宮の女房として紫式部や伊勢大輔などお仕えしていたが、翌年の初夏の頃和泉式部も出仕することになる。迎えたのが伊勢大輔である。

宮にはじめてまゐりたりしに、祭主輔親がむすめ大輔といふ人をいだし給ひたりしと物語などして、局において大輔の許に

・思はむと思ひし人と思ひしに思ひしことも思ほゆるかな(九三〇)

返し

・君をわが思はざりせばわれを君おもはむとしも思はましやは(九三一)

さらに、中宮彰子も何かと心遣いされており、次の贈答歌がある。式部も面映さを感じて返歌を御帳のかたびらに結いつけて退室している。祭の日、御前に人すくなにて侍ふに、葵に御手習をさせ給ひて

・ゆふかけて思はざりせば葵草しめのほかにぞ人を聞かまし(四六四)

おほむかえし聞えむもはゆければ、ゆふを御帳のかたびらにゆひつけて

たちぬ

・しめのうちを慣れざりしより木綿櫛心は君にかけてしものを(四六五)

こうした中で、ある人が扇を道長に見せたものだから、道長からは「うかれめの扇」と扇に書かれからかわれてはいる。一方、歌人としては評価し、中宮彰子に仕えさせたこともあって、返歌をしている。

ある人の扇をとりて持たまへけるを御覧じて、大殿、「誰がぞ」と問はせ給ひければ、「それが」と聞え給ひければ、とりて、「うかれ女の扇」と

書き付けさせたまへるかたはらに

・越えもせむ越さずもあらむ逢坂の関もりならぬ人などがめそ(二二六)

二・六 藤原保昌と結婚と丹後に下向

中宮彰子に出仕後間もない頃、道長の配慮で下司の保昌と結婚する。丹後に下るおりの宮との贈答歌が残されている。

丹後に下るに、宮よりきぬあふぎたまはせたるに、天の橋立かかせ給ひて

・秋霜のへだつる天の橋立をいかなるひまに人渡るらむ（四六六）

御返し

・思ひ立つそらこそなけれ道もなく霧わたるなる天の橋立（四六七）

同じく出仕していた娘小式部内侍の後見を依頼した歌が続く

大輔の命婦に、「とまる人よくをしへよ」とて

・別れ行くところを思へわが身をも人のうえをもしる人ぞしる（四六八）

丹後にありけるほど、守のぼりてくだらざりければ、十二月余日、雪いみじう降るに

・待つ人はゆきとまりつつあぢきなく年のみこゆるよさの大山（五八二）

人のかへりごとに

・としをへて物おもふことはならひにき花にわかぬ春しなければ

（五八四）

注 この歌が詞華集に採られており、詞書、本文とも異同がある。

保昌に忘られて侍りける頃、兼房朝臣のとひて侍りければよめる

・人知れずもの思ふことはならひにき花にわかぬ春しなければ（詞華集

巻第九雑上三一〇）

二・七 晩年の式部

中宮彰子の妹の皇太后妍子が亡くなり、その七七日の法事が十月二八日

に道長の建立した法成寺の阿弥陀堂で行われた。その前日の準備の様子が栄花物語巻第二九「たまのかざり（二二六）四九日の法事の準備」に書かれている。

このたびの御仏造らせたまふ御飾りの御料には、大和守保昌朝臣のがり、玉を召しに遣はしたれば、京の家に奉るべきよし言ひ上げたれば、まぬらすとて、和泉添へたり（保昌は任地にいて不在）。

・数ならぬ涙の露を添へてだに玉の飾りをまさむとぞ思ふ

同じ御料の玉を、権大進為政が請ひたりければ、赤染（衛門）、

・別れにし魂は返すにかたけれど涙のみこそ袖にかかれる

その後、保昌から忘れられて詠んだ歌を示す。

後拾遺集第二十 雑六 神祇に見える歌

男に忘れられて侍りける頃、貴布禰にまゐりてみたらし河に螢のとび侍りけるをみて詠める

・物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出る玉かとぞみる

御返し

・奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかりものな思ひそ

この歌は貴布禰の明神の御返しなり。男の声にて和泉式部が耳に聞こえけるとなむいひ伝へたる

二・八 式部の歌の追記

今まで述べてこなかった式部の歌がある。これらの歌は式部を取り上げるときに欠かせないものなので挙げておくことにする。

その一つが、拾遺集巻第二十 哀傷一三四二 採られており、「性空上人のもとに、よみてつかはしける」の詞書がある。また、作者名は雅致女

式部となっている。これが、式部集（二五一）では「はりまのひじりのもとに、結縁のためにきこえし」の詞書で収録されている。

・くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山のはの月

この歌は、何時頃詠まれたかについては疑問があるが、勅撰集の拾遺集に撰ばれた最初の一首である。このときはこの一首のみで、作者名が前記の通りである。したがって、歌われたのが若い頃と見られている（これは幾つかの説に分かれていて、性空上人の没ぎりぎりまで式部の年代を上げようと意図した諸本も見受けられる）。それにしても、苦悩があつて、これを取り除くために性空上人を頼つたと見ると、当時は今と違って相当若い頃から結婚していたこともあつて、現代の同時代の子女からは想像もつかない境地であつた状況が伺える。もう一つの歌を次に示す。

わりなくうらむる人に

・津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなければ葦の八重

ぶき（六九九、後拾遺集恋二二六九一）

まず、式部と赤染衛門を比較して、当時は赤染衛門の方が歌人として認められていた時代であり、そのことを了承しながらも、公任は式部の歌を評価していることが伺える。これに対して、定頼は諸手を挙げて式部を絶賛しており、新旧の認識の違いを読み取ることが出来る。

さらに、百人一首歌である。後拾遺集恋三 七六三にあり、詞書は「心地例ならず侍りけるころ、ひとのもとにつかはしける」で、和泉式部集七五三では「こちあしきころ、人に」となっている。

あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびの逢ふこともがな

歌意から間近な死を予感して、恋人に贈った歌であると思われる。しかし、保昌が亡くなつた後の式部の同行がつかめていない状況の中で、い

つ頃誰に送つたかの消息がつかめていない。道貞ではないかとの説もある。

二・九 和泉式部のゆかりの地と伝説

式部にはその後創られた物語や謡曲があり、各地に生まれた伝説やお墓がある、これらの一部を紹介する。

① 物語や謡曲について

物語性の強い内容では、先に述べた貴布禰（貴船）神社に詣でたときの事柄も勅撰集に撰歌されてはいるが、伝説に類する部類に入ると見られないこともない。時代が下つて、風雅和歌集卷第十九神祇歌二一〇九番にはこの歌は、後白河院熊野の御幸三十三度になりけると、みもといふところにてつげ申させたまひけるとなむ

もとよりもちりにまじはる神なれば月のさはりもなにかくるしき

是は、和泉式部熊野へ詣でたりけるに、さはりにて奉幣かなはざりけるに、「はれやらぬ身の浮き雲のたなびきて月のさはりとなるぞ悲しき」とよみて寝たりける夜の夢につげさせ給ひけるとなむ

この歌を柳田國男はその著書で、勅撰集の中での伝説の歌としてあげている。

次に、古今著聞集、宇治拾遺物語、御伽草子などでは、道命阿闍梨と式部にまつわる説話を挙げている。道命阿闍梨は右大将道綱母である。ところが、ここでは、遊女であつた若い式部が橘保昌と契つて生まれた子を五条の橋に捨てる。この子が成長して、道命阿闍梨になつて現れ、式部と契ると言う物語である。

この背景には、式部が敦道親王亡き後、道綱との歌の交流があつたこと

や、恋多き女であったこと、道命が美声であったことなどがこのような物語を生んだのかもしれない。他にも、田刈る童との説話や、式部は鹿の子などがある。

謡曲では「東北」と「誓願寺」があり、式部の命日とされる三月二日には誠心寺でこの謡曲が奉納される。「東北」は東北院における式部と軒端の梅にまつわるものである。「誓願寺」は「和泉式部縁起絵巻」とも関係した謡曲で、式部の化身が現れて本堂正門にかかる誓願寺の額の代わりに「南無阿弥陀仏」の六字名号を掲げるように訴えたというものである。

② ゆかりの地

先に挙げた、東北院、誓願寺、誠心寺などが京都内でのゆかりのところである。中でも誠心寺には前記のように式部の命日に謡曲の奉納や式部の尼僧木像、狩野休園の式部図、式部縁起絵巻などが拝観出来る。また、ここには式部の墓（宝篋印塔）がある。その他にも、全国でいくつも知られており、代表的な供養塔として、大津市、伊丹市、木津川市、守口市、堺市、和歌山田辺市、西播磨、篠山近くの桑原、山陽の埴生、などがある。また、宮崎市から西北に行ったところに法華岳薬師寺があり、そこで式部の病氣平癒がかなわず身投げしたとの伝説のあることが朝日新聞（平成十九年七月十四日）に掲載されていた。生誕の地としては、福島県石川町の曲木、嬉野市など全国に多数あると言われている。このように各地にゆかりの地が見られるのは、一つは、誓願寺を中心とした比丘尼が各地を廻り遊行不住の中で広まったと見られる。

三・小式部内侍の和歌

三・一 経歴

橘道貞と和泉式部の娘。生年未詳で、万寿二年（一〇二五）十一月二十八歳くらいで亡くなっている。

母と同じ中宮彰子に寛弘六年（一〇〇九）頃仕える。初め堀河右大臣頼宗と交際していたが、その弟二条関白教道との間に男子（後の権僧正清円）を出産。また、範永との間に女子（堀河右大臣家女房範永女）を出産。

万寿二年十一月に、滋井頭中将公成の子頼仁（後の頼忍阿闍梨）を出産後亡くなっている。他に、定頼とも交流が認められる。

三・二 勅撰和歌集撰歌から

①金葉集Ⅱ（二奏本）巻第九雑上五五〇（百人一首六〇番歌）

詞書「和泉式部、保昌に具して丹後国に侍りけるを、中納言定頼つぼねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人つかはしけむや、使ひはまうでこずや、いかにも心もとなくおぼすらむ、などはぶれて立ちけるを、ひきとどめてよめる。」

・大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

注：この歌に関係して、俊頼（百人一首第七四番歌）の歌論書「俊頼髓脳」には、貫之（百人一首第三五番歌）が歌を詠むのに十日も二十日もかけていると云った後に、この歌が紹介されて、即興も良い歌があると云っている。その後、この歌のいきさつを述べている。その中で先に述べた、詞書に追加すれば、母が丹後に下向している間に、都に歌合の歌人に撰ばれ、出詠歌を考えていたところで、恋愛関係にあった定頼より母に代作を依頼したかといういたずら心を起こしたことが背景になっている。ところが、逆にその場を立ち去ろうとした折、御簾から半ば乗り出して、軽く定頼中納

言の直衣の袖を押さえてこの歌が詠まれたものだから、めんくらって、しばらく返歌なども考えたが、思いつかず袖を引き払って逃げてしまった。このように、素早い発想で詠むのも立派であると云っている。

② 教道との歌

詞花集卷第九雜上二八〇

詞書「二条関白(教道)、白川(京都市左京区岡崎周辺)へ花見になむといはせて侍りければ、よめる」

・春のこぬところはなきを白川のわたりにのみや花はさくらむ

後拾遺抄卷十七雜三 一〇〇一

詞書「二条前大臣、日頃患いて、おこたりて後、『など問はざりつるぞ』と言ひはべりければよめる」

・死ぬばかり嘆きこそは嘆きしかいきてとふべき身にしあらねば

③ 続後撰集卷第二春下一四四

・見てもなほおぼつかなきは春の夜の霞をわけていづる月影

④ 玉葉集卷第二春下一八四

・雪かどぞよそにみつれど桜花をりては似たる色なかりけり

⑤ 続後撰集卷第四夏二六三

詞書「七月七日の夜、小弁上東門院にまゐりて、あくるあしたいでけるにつかはしける」

・たなばたのあひてわかるゝなげきをもきみゆへけさぞ思ひしりぬる

⑥ 金葉集Ⅲ(三奏本) 卷第三秋一七六(新後拾遺集卷第十羈旅八七四)

詞書「屏風の絵にあふさかの関かけるところをよめる」

・人もこえこまもとまらぬあふさかのせきは清水のもる名なりけり

⑦ 新千載集卷第十四恋四

・かねてより思ひしことのかはらぬはほどなく人のつらきなりけり

四・和泉式部と小式部内侍の和歌

① 詞書「小式部内侍十一歳頃の歌 住吉の浦に母子で院のお供をした折浦に浮かぶ千鳥や鷗をみて」

(和歌威徳物語)

・ちはやぶる神の斉(い)垣にあらねども波の上にも鳥居たちけり

② 小式部内侍が病が重い折

・いかにせむいくべき方もおぼほえず親に先立つ道を知らねば

③ 小式部内侍亡き後和泉式部の歌

詞書「内侍の亡せたるころ雪の降りて消えぬれば」
・などて君むなしき空に消えにけむ淡雪だにもふればふる世に

④ 詞書「小式部の内侍みまかりて後、常に持ちて侍りける手箱を誦徑にせさすとして」

・恋ひわぶと聞きにだに聞け鐘の音に打ち忘らるる時の間ぞなき(新古今

集卷八哀傷八一六)

⑤ 詞書「小式部内侍、露置きたる萩織りたる唐衣を着てはべりけるを、みまかりてのち、上東門院より尋ねさせ給ひけるに、奉るとて」

・置くとみし露もありけりはかなくも消えにし人を何にたとへむ(新古今
集卷八哀傷七七五)

御返し

上東門院

・思ひきやはかなく置きし袖の上の露を形見にかけむものとは

- ⑥ 詞書 「内侍亡くなりて次の年七月に例やる文に名のかかれたるを」
- ・もろともに苔の下には朽ちずして埋もれる名を見るぞ悲しき
- ⑦ 詞書 「小式部内侍亡くなりてのち、むまごどもの侍りけるを見て」
- ・留めおきてたれをあはれと思ひけむ子はまさるらむ子はまさりけり
- ・身にしみて物のかなしき雪げにもとどこほらぬは涙なりけり
- ・いにしへはありけることと聞きながらなほ悲しさのふりがたきかな
- ・憂きことも恋しきことも秋の夜の月には見ゆるこちこそすれ

六・参考文献

- ① 清水文雄 「校定本 和泉式部集（正・続） 笠間書院（一九八二）
- ② 佐伯梅友・村上治・小松登美 「和泉式部集全訳（正・続） 笠間書院（二〇二二）
- ③ 藤岡忠美校注・訳 「和泉式部日記」 小学館（一九九四）
- ④ 岩佐美代子著 「和泉式部日記注釈」 笠間書院（二〇一三）
- ⑤ 山中裕、秋山虔、池田尚隆、福永進校注・訳 「栄花物語」 小学館（一九九八）
- ⑥ 馬場あき子 「和泉式部」 美術公論社（一九八二）
- ⑦ 増田繁夫 「冥き道―評伝和泉式部」 世界思想社（一九八七）
- ⑧ 寺田透 「和泉式部」 日本詩人選八 筑摩書房（一九七二）
- ⑨ 橘健二、加藤静子校注・訳 「大鏡」 小学館（一九九四）
- ⑩ 松田武夫校訂 「詞華和歌集」 岩波文庫 岩波書店（一九九四）
- ⑪ 西下経一校訂 「後拾遺和歌集」 岩波文庫 岩波書店（一九九四）
- ⑫ 日本歴史大辞典編集委員会編 「日本史年表 第四版」 河出書房新社（一九九八）
- ⑬ 中野幸一校注・訳 「紫式部日記」 小学館（一九九四）
- ⑭ 石塚龍麿原者 「校証古今歌六帖（上）」 有精堂出版（一九八四）
- ⑮ 菊池良一、村上光徳、坂口博規編 「方丈記 無名抄」 双文社（一九九四）

- ⑯ 浅見和彦校注・訳 「十訓抄」 新編日本古典文学全集五一、小学館（一九九九）
- ⑰ 柳田國男 「女性と民間伝承」 角川文庫、角川書店（一九六六）
- ⑱ 桑原博史校注 「無名草子」 新潮日本古典集成（第七回） 新潮社（一九七六）